令和４年度　学校評価（総括評価表）

徳島県立鴨島支援学校

令和４年度　学校評価（総括評価表）

徳島県立鴨島支援学校　Ｎｏ１

重点課題	重点目標	自　己　評　価			総合評価	A	学校関係者評価 今後の改善方策
◆児童生徒一人一人を大切にし，その個性や能力に応じて自己実現をめざす個別最適な教育の推進	＜小学部＞ ・児童一人一人の特性や配慮事項等の共通理解を図り，児童の中心的課題を考えることで個別最適な授業作りの基盤をつくる。	**評価指標** ・現在授業を実施できている通学生３名と自宅訪問生１名の児童について，中心的課題を導き出すための学部ケース会を，一人につき１回以上実施することができる。	**評価指標による達成度** ・３名については検討会を実施し，登校していない１名については担任の研修という形で実施した。通学生及び自宅訪問生の中心的課題を導き出すための学部ケース会を予定通り実施することができた。	**評定** A	（所見） 付箋を活用して意見を可視化することで，共通する意見などから児童の実態や課題がより明確になった。反対に，関わりの少ない教員の視点からは，表面的な児童の様子と実態とのギャップなどが明らかになった。 自立活動の項目に当てはるのかが分かり，他の課題との関連が見え，教員も活発に意見を交わすことができた。担任は，今行っている指導の裏付けにもなったようである。 今年度は「関連図」を用いて中心的課題を考えるところまでを実施したが，今後教育目標に反映するところまで検討できれば，より日々の指導に活かすことができると考えている。		・小学部の評価指標が「一人につき１回以上実施」というレベルで良いのかと思っていたが，中心的課題を導き出すために，何度も個別のケース会議を開いているなどの実施状況を聞いて，評価指標の数値目標について納得できた。 ・中高等部の評定がBになっていることについて，小学部のAの評価と評価指標との兼ね合いについて知りたい。 →評価指標の回数だけが評価の対象ではない。１回に対してのプラスアルファの部分が多くあるので，小学部はAと評価した。 また，中高等部は年間４回，個別の教育支援計画や指導計画を元に情報交換ができている。数値目標通りの達成はBである。Bは決して悪いという意味ではない。目標が達成できたという意味で使っている。 ・小学部は中心的課題を考えることで，また，中高等部は社会参加と自立に向けた内容を考えることで個別最適な教育の推進について取り組んできた。両学部とも，子ども一人一人を大切にするため，職員間の共通理解ということを重点に置き，ケ
		活動計画 ・学部ケース会等を通して児童の特性や配慮事項等を周知することで教員間て理解を深める。 ・児童の中心的課題に関する学部ケース会を企画し，実態把握をもとに各教員がそれぞれ課題を出し合い，協議することで児童の中心的課題を導き出す。	**活動計画の実施状況** ・学部ケース会や学部朝礼及び学部会などで，児童の特性や配慮事項等をこ態についての理解を深めた。 ・自立活動の「指導立案シート」をもとに学部ケース会を実施し，各教員の捉えた実態や考えられる課題を付箋に書いて出し合うことで，出てきた意見の可視化を図り，課題を見い出しやすくした。出てきた課題を「関連図」として関係付けることで，基盤となる中心的課題を導き出すことができた。				
	＜中高等部＞ ・生徒の社会参加と自立に向けての支援方法を，学部内で共通理解する。	**評価指標** ・生徒の実態や支援方法を情報共有するための学部ケース会を，生徒一人につき年間４回実施する。	**評価指標による達成度** ・学部ケース会を生徒一人につき年間４回実施することができた。	**評定** B	（所見） 高等部３年生については，卒業後に向けて，より具体的な支援方法を話し合うことができた。高等部１年生は，就業体験を通して見え報共有ができた。中学部の生徒についても，現在の課題を卒業後の生活に照らし合わせながら，現段階で取り組むべき支援方法を考えていくことができた。 学部ケース会は生徒一人につき年間４回であったが，必要に応じて各クラスや学習グループごとに共通理解を図る機会を持つことができた。 次年度も教員がお互いに声を掛け合いながら，生徒の情報共有をする場を積極的に設けていきたい。		
		活動計画 ・個別の指導計画の様式５及び６をもとに，前期・後期に各２回ずつ学部ケース会を実施し，担任や教科担任からの情報を学部の教員全員で共有する。	**活動計画の実施状況** ・前期と後期に各２回ずつ学部ケース会を実施し，生徒一人一人について，担任や教科担任から情報を得ることで，学部全体での情報共有ができた。在宅訪問生や病棟訪問生についても，個別の教育支援計画や指導計画をもとに，現状を報告することで共通理解を図ることができた。				

	＜研究課＞ の指導の充実を図るため，自立活動の指導内容を整理したり，様々な支援方法について学んだりすることで，個別の指導計画に反映できるようにする。	**評価指標** 立活動の指導内容６区分に分けて整理する表を作成し，それについて話し合う機会を年間２回以上設ける。 ・児童生徒の実態や課題に焦点を当て，支援方法等について学ぶ事例検討会を年間３回以上実施する。	**評価指標による達成度** 分に分けて整理する表を作成し，学級（ホームルーム）を基本としたグループで話し合う機会を２回設けることができた。 ・給食等の指導のコンサルテーションを受け，担当者間で年間５回の話し合いを実施した。また，他の事例に基づいたミニ研修会も２回実施することができた。	**評定** A	**（所見）** をもとに，自立活動の指導内容６区分に分けて整理する表を作成し，話し合いを持つことができた。指導内容を６区分に当てはめることで，児童生徒の実態に照らし合わせた課題がより明確になった。 今年度の話し合いを受けて，次年度はさらに細やかきるようにしていきたい。 また，支援方法については，専門家によるコンサルテーションやミニ研修会で児童生徒の実態と課題に焦点を当てて研修することができた。今後は，学級（ホームルーム）や学部内で，支援方法についてより共通理解を図っていきたい。	ース会議を積み重ねてきた。その中で見えてきたことや今年度積み残したことを次年度に活かし，更なる指導の向上を目指していきたい。 ・研究課の研修に関しては，どのような研修も実際の日々の指導で得た中長期的な課題を考えることを並行してやられていると思うので，研修成果を日々の指導に取り入れていく難しさがあるのかもしれない。 →研究課では，自立活動を切り口に個別最適な教育の推進を進めた。特に外部の専門家の意見を取り入れることで校内だけでは取り組めなかった課題にも取り組むことができ，一定の成果がみられた。 次年度も専門家との繋がりを途切れさせないよう，引き続き支援方法を探っていきたい。 ・GIGAスクールサポーターについて教えてほしい。 →ICTに関することをサポートしてもらっており，夏季休業中の研修では，「iPadによるパワーポイントの有効な使い方」についての研修をしてもらった。SEなどの専門家が教員では難しい部分をサポートしてくれる。 ・コロナ禍で推し進められた遠隔授業に関する機器については，情報視聴覚課が中心となり整備を行っていった。研修やテレビ会議シス
		活動計画 とに，児童生徒の実態を整理し，そこから考えられる課題をそれぞれ挙げて，個別の指導計画の目標につなげられるようにする。 ・児童生徒の実態や課題から考えられる様々な支援方法について，教員間でテーマを出し合い，研修を実施する。	**活動計画の実施状況** つなげられるよう，グループで話し合うことができた。 ・専門家からの助言をもとに担当者間で支援方法について話し合い，研修を実施することで担当者以外の教員とも共通理解を図ることができた。ミニ研修会でも，生徒の実態から考えられる支援方法について，教員間で研修を進めることができた。			
	＜情報視聴覚課＞ ・教員のICT活用にを図り，児童生徒のニーズに即したICT教材や支援機器を使用することや，病棟・家庭・地域間をつなげるテレビ会議システムを活用する。	**評価指標** ・ICT機器や支援機器等の活用に関す年間10回以上実施する。 ・在宅や病棟の児童生徒とのテレビ会議システムを利用した学習を年間10回以上実施する。	**評価指標による達成度** ・ICT機器の操作や支援機に３回実施できた。 また，遠隔授業に関する研修についても，年間10回以上実施できた。 ・テレビ会議システムを利用した学習は，学校行事の利用も含め，年間10回以上実施することができた。	**評定** A	**（所見）** 校内研修への参加状況かした教育への関心が非常に高いことが分かった。 次年度は年度当初にアンケートを取り，よりニーズに合わせた校内研修を計画していきたい。 学校と病棟間，学校と家庭間でのテレビ会議システムの利用が急速に増え，授業をはじめ地域との交流に活用することで，通学できない児童生徒の学習保障や交流活動の一助となった。 また，遠隔システムを活会」や「ターゲットボッチャ大会」に積極的に参加することにより，県内外の学校の児童生徒はもとより，外国の選手とも交流することが可能となった。	
		活動計画 ・ICT機器や支援機器等の活用に関する内容や遠隔授業についての校内研修を実施する。 ・病棟や在宅訪問の家庭と日程調整を行い，テレビ会議システムを用いて授設ける。	**活動計画の実施状況** ・ICT機器の操作研修や支援機器スイッチの制作実習，アプリケーションソフトの活用方法等について校内研修を実施した。 ・吉野川市役所や藤井寺との地域交流及びボッチャ大会等に，テレビ会できた。			

					テムを使った様々な交流の機器の準備を担った。今後も情報化は進んでいくと考えられる。新しい機器に対して今後も学校のパイロット的な役割を果たしたい。

徳島県立鴨島支援学校　Ｎｏ２

重点課題	重点目標	自　己　評　価			総合評価	Ａ	学校関係者評価 今後の改善方策
◆安心安全な教育環境の整備と危機管理の推進	＜小学部＞ ・常に危機意識をもつとともに，防災や緊急対応訓練等を実施し，教員の安心安全への意識の向上を図る。	**評価指標** ・年間28回以上の危機管理に関する取組を行う。	**評価指標による達成度** ・学部会等において，教員が一人２回以上，危機管理に関する内容を発表し，全体として30回以上の危機管理に対する取組を行うことができた。	**評定** Ａ	**（所見）** 年度初めに実施している緊急コールの仕方や防災グッズの場所の確認に始まり，今年度は個々の教員の視点から，学部内で危機管理に関するアナウンスを行った。そのことで，いろいろな方面での危機管理の意識付けができたと感じている。 定期的に「安全管理チェックシート」を用いた点検を継続することで，常に安全な環境を意識付けることができ，防犯ブザーのチェックもできた。 年度が替わると職員の構成が変わるため，毎年安全管理を維持できる書式やシステムを整える必要がある。		・小学部の取組で，危機管理に関する内容を各教員が一人２回以上発表するのは良い取組と思う。教員自らが課題を持って取り組むことで責任感が生まれ，より効果的な研修になると思った。プチ研修や輪番研修は効果的であると思う。 ・緊急対応訓練もおこなったのか。 →今年度は，児童が登校した時に起こると予測できる緊急事態に対する対応訓練を行った。１学期に机上訓練として，想定に対する行動を学部で話し合った。また，２学期には実際に動いてみて，対応に不具合がないかを検証した。 ・生徒と一緒に危険箇所を確認する中高等部の取組は良いと思う。教員だけでなく生徒が自ら安心安全な学校生活について考えるきっかけになる。 チェックの方法も生徒一人一人に合わせて，
		活動計画 ・学部会後に危機管理に対するプチ研修を行う。 ・教員全員が輪番で学部の職員朝礼で定期的に危機管理の啓発を行う。 ・学部集会等で児童への防災等の活動を取り入れ，児童にも啓発を図る。 ・昨年度作成した「安全管理チェックシート」は継続して活用する。	**活動計画の実施状況** ・防災時に役立つ対応方法についての研修を行い，緊急時に必要な対応について，機会を捉えて確認した。 ・職員朝礼時に，その時教員が必要と思う危機管理の一言を発表し，危機管理意識を再確認した。 ・学部集会に防災の内容を取り入れることで，児童も防災の意識が持てるようにした。 ・月末に「安全管理チェックシート」を用いて安全確認することで，常に気をつける場所やポイントを意識できるようにした。				
	＜中高等部＞ ・生徒が安心安全な学校生活を送れるように環境の整備を図る。	**評価指標** ・各教室の危険箇所の有無の確認を２か月に１回実施する。	**評価指標による達成度** ・確認事項の４項目，「壁にヒビはないか」，「棚の上に物を置きすぎていないか」，「窓の鍵は壊れていないか」，「窓ガラスは割れていないか」について，２か月に１回，各教室の安全点検を実施することができた。	**評定** Ｂ	**（所見）** 定期的に点検を実施することで，安心安全への意識を高めていくことができた。生徒は自分達が使う教室を安全に使う意識を持ち，教員も生徒と一緒に確認することで，生徒が安心安全に使うことができるようにという意識をさらに高めることができた。 今年度は，各教室の報		・生徒と一緒に危険箇所を確認する中高等部の取組は良いと思う。教員だけでなく生徒が自ら安心安全な学校生活について考えるきっかけになる。 チェックの方法も生徒一人一人に合わせて，
		活動計画 ・チェックシートを作成し，２か月毎の最終木曜日の総合的な学習（探究）の時間に，生徒と一緒に各教室等を確認する。	**活動計画の実施状況** ・総合的な学習（探究）の時間に，生徒と教員が確認しながら，上記の４項目についてチェックシートに記入（シール貼り）をして，各教室の				

			状況を把握することができた。	告を担任から担当教員に行っていたが，次年度は，学部全体で報告するようにして，環境整備の安全確認を学部全体でできるように進めていきたい。	工夫されていた。 ・防災が主になりがちだが，緊急対応訓練も大切だと思う。不審者に対する危機管理についてどのような対策を行っているのか教えてほしい。 →２月に元警察署勤務の方を講師として，講義と刺股の使い方の研修を行った。刺股も新たに購入した。講義では立ち向かうよりは逃げることを考えた方が良いとのことだったが，本校の児童生徒は自分で逃げるということが難しい。その場合，１カ所に集まる，閉じこもる方法も知った。 次年度はマニュアルを見直し，新たに作成したい。不審者が入ってくるかもしれない場所を教職員で見直し，情報共有をどのようにするか，どう伝えるかも考えていきたい。
＜特別活動課＞ ・防災教育を通して，災害時における児童生徒の主体的な安全確保の能力向上を進めるとともに，地域住民との交流や近隣病院と連携を深める。		**評価指標** ・近隣病院を避難場所とする避難訓練を年間１回実施することができる。 ・年間1回以上，地域の方に周辺地域の自然災害への危機管理についての働きかけと啓発活動を行う。	**評価指標による達成度** ・近隣病院を避難場所とする避難訓練（南海トラフ大地震による震度６の揺れを想定した）を１回実施した。 ・小・中・高等部の児童生徒が２グループに分かれ，リーフレットの配付や防災オリエンテーリングを実施する等，啓発活動を２回行った。	**評定** A	**（所見）** 様々な防災学習を通して，児童生徒や教職員が安全な避難の方法や災害時に起こりうる状況を想定した行動の取り方等を経験し，防災意識を高めることができた。 今年度，新たに近隣病院の協力を得て避難訓練を実施できたことや，周辺地域へリーフレットを配付したことで，地域の方や近隣病院，施設等と連携を深めることができた。また，啓発活動にもつながったと感じた。
		活動計画 ・近隣病院と連携し，病院を避難場所とする地震避難訓練を計画し，実行する。 ・周辺地域の防災情報や学校のQRコードを掲載したリーフレットを制作し，生徒が地域住民に配付する。 ・地域の方や近隣病院，施設等をチェックポイントとした防災オリエンテーリングを実施する。	**活動計画の実施状況** ・近隣病院までの安全な避難経路を想定し，児童生徒と教職員が経路を確認しながら避難できた。 ・防災情報と学校QRコードを掲載したリーフレットを配付し，防災と本校についての啓発活動を行った。 ・地域の方や近隣病院，施設の方にも協力していただき，防災オリエンテーリングを実施することができた。		

徳島県立鴨島支援学校　Ｎｏ３

重点課題	重点目標	自　己　評　価			総合評価	A	学校関係者評価 今後の改善方策
◆研修の充実と教員の専門性の向上	＜小学部＞ 専門家によるアドバイスや各教員が持つ専門的知識を情報共有することで学部の児童に関する指導の専門性を向上させる。	**評価指標** ・専門家から得たアドバイスや各教員が持つ専門的な知識を学部会後やケース会を活用して研修し，専門的知識の共通理解を図る。年間14回以上研修会を実施する。	**評価指標による達成度** ・教員が一人１回以上，年間で14回以上の研修を計画し，実施することができた。その他にも必要に応じて任意で研修を行うことができた。	**評定** A	**（所見）** 各教員の専門を活かした研修により，教員の指導の専門性向上の一助となった。また，教員が講師を担うことでお互いに教え合う学部の体制を築くことができたと考えている。 また，専門家から得たアドバイスや知識を担任だけでなく学部で共有することで，全体の専門性を少しずつ積み重ねることができている。その周		・研修を熱心にやられていると感じるが教員に負担はないのか。働き方改革としてはどのように考えられているか。自分としては教育の質の向上や子どもや保護者と向き合う時間の算出が働き方改革の本質と理解している。 また，数値目標を掲げることについては，数値目標が立てられる内容を選ぶようになっ
		活動計画 ・コンサルテーションや社会人講師によるアドバイスを学部職員に周知し，児童に必要な知識を共有する。 ・専門家による助言のない児童について	**活動計画の実施状況** ・コンサルテーションや社会人講師によるアドバイス等について，職員朝礼や学部会終了後の時間を利用して学部内で情報共有を図り，児童の指導を一貫して実施できるよう体制を整えることができた。 ・各教員が１回以上講師となり，研				

		は，各教員のもつ専門的な知識や技術について研修する。 ・教員一人１回以上研修を計画し，講師を担う。	修を実施した。情報機器に関することや医療的ケアに関すること，バイタルの見方，姿勢の見方，発達障がいについて，教科の指導に関すること，教材の工夫，環境整備など，各教員の専門性を活かした研修を行った。	知の方法については時間を設けての研修と紙面での情報共有を行った。必要に応じて効率的，効果的な方法を選択することで負担なく実施でき，積み重なっていくと感じた。	ていくのではないかと懸念している。努力目標などにしてみたら良いことや，増減するべきものを出すなど，学校ならではの評価で良いのではないかと思う。 →第三者に説明するためには数値というものが視覚的に分かりやすいため取り入れている。しかし，大事なのはそこではなく，数値目標は単なる一つの切り口であり，判断材料とはするが，数値目標だけにとらわれずに多面的に取り組んでいる。 ・リモートでの会議は今後コロナ禍が終わってもなくならないだろう。効果的に行っていく方法を検討する必要がある。 ・中高等部の特別支援教育学会での発表は，学部全体で研究課題を考えて進めていったことが素晴らしい。研究発表を個人研究の発表の場だけと捉えずに，今回のように学部全体で取り組むことが，協働する姿勢を教職員間に定着させることになるのだと思う。
	＜中高等部＞ ・特別支援教育学会分科会発表が有意義な発表になるよう研修を充実させる。	**評価指標** ・発表までに，全体及び「進路学習」，「地域交流」，「教科学習」の３グループごとに，各々3回以上研修を実施する。	**評価指標による達成度** ・全体については助言講師を招いての研修を２回，助言後の研修を４回実施した。グループについては，どのグループも４回研修を実施した。	**評定** A	**（所見）** 「遠隔システムを活用した学習活動」を発表テーマとして，令和２年度から２年余り，実践と研修を積み重ねてきた。 今年度は８月の大会に向けて，全体とグループに分けて研修を重ねることで，より良い発表資料が完成できるよう，中高等部全員が一丸となって取り組んだ。 その結果，発表の形になるまで，全員が協働して進めていくことができた。大会後のアンケートより，他校からも良い評価を得ることができた。
		活動計画 ・発表本番に向けて資料を作成し，発表前には各々の役割を確認しながら準備していく。	**活動計画の実施状況** ・学部全体では，分科会助言者に指導していただきながら内容についての研修を行った。グループについては，資料をグループ内で確認した後，全体で見直すことを何度も繰り返した。大会はリモートでの実施であったため，事前の録音や録画（発表者の挨拶）等も含めて，各々が自分の役割を果たし，全員の協力のもと準備していくことができた。		
	＜教務課＞ ・教員が，学校支援システムによる指導要録の作成をスムーズに行えるように，研修ビデオを作成する。	**評価指標** ・９月末を目途に研修ビデオを作成して，10月の職員会議で周知することができる。	**評価指標による達成度** ・研修ビデオを作成して，10月の職員会議で周知できた。	**評定** B	**（所見）** 研修ビデオが作成できたので，後は指導要録の作成時期に，その利用方法について，より丁寧に説明していくことが必要である。
		活動計画 ・１学期中に，昨年度研修のために作成したパワーポイントの資料を更新する。その後，パワーポイントの資料に基づいて，解説をしながら作業をしている様子をビデオに収め，完成させる。	**活動計画の実施状況** ・予定通りパワーポイントの資料の更新を行い，研修ビデオを作成することができた。		

徳島県立鴨島支援学校　Ｎｏ４

重点課題	重点目標	自　己　評　価			総合評価	A	学校関係者評価 今後の改善方策
◆保護者・地域及び関係機関との連携や協働による持続可能な学校づくり	＜小学部＞ 児童一人一人を幅広い基盤で支え，切れ目ない支援の礎を築くため，地域及び関係機関に働きかけ，ケース会及び情報交	**評価指標** ・一人につき，年間１回以上地域及び関係機関を交えたケース会及び情報交換会を行う。	**評価指標による達成度** ・ケース会や訓練見学，書面等での情報共有等，児童一人について年間１回以上ケース会や情報交換会等を行い，教育活動に活かすことができた。児童によって関係機関や回数は異な	**評定** A	**（所見）** 教育のみの視点だけではなく，関係機関を交えたケース会等で情報共有を行うことで，幅広い視野で児童を把握し，将来を見据えた切れ目ない支		・太鼓を通して飯尾敷地小学校とリモートで交流できて良かった。太鼓を通した地域との取組がコロナ禍でも行われたことは評価でき

	換会を行い，教育活動をよりよいものにすることができる。		る。実施した内容を書面回覧や学部会等で共通理解することができた。	援の基盤を作ることができた。情報共有することにより，児童への支援がより充実したものになるとともに，教育が担う内容についても，より明確になったと考えている。 しかしながら，様々な情報が得られる反面，それを教育に活かす教員の連携活用の資質の向上が今後の課題である。	る。コロナが収束して直接交流ができるとより良いと思う。 次年度の取組として，吉野川市の竹林整備から出た竹材で作った竹パウダーや竹水を活用した石けんを作ることに取り組んではどうかと提案する。
		活動計画 ・児童を支援する関係機関や地域に働きかけ，ケース会や情報交換会を行い，児童の教育や支援に活かす。 ・個別の支援計画の様式４に反映させ，関係機関との連携を充実したものにする。	**活動計画の実施状況** ・病院やリハビリ等の専門機関及び放課後等デイサービス事業所，相談支援事業所，各種相談機関等を含めたケース会を実施した。記録を残し，関係機関との連携を教育活動及び児童の支援に活かした。 ・児童を取り巻く支援機関や役割が分かるように，その都度個別の支援計画に記載した。		
	＜中高等部＞ ・生徒の活動への理解向上のため，吉野川市役所や藤井寺の方々との交流を深める。	**評価指標** ・吉野川市役所及び札所との交流は年間３回を予定しており，遠隔（リモート）を基本としつつ，年間１回は直接交流をする。	**評価指標による達成度** ・吉野川市役所と３回，札所とは２回，それぞれ遠隔で交流活動ができた。 その内，２回ずつ一部の生徒が直接交流をすることができた。 **評定**：A	**（所見）** コロナ禍において，吉野川市役所及び札所共に，２年振りに直接交流ができた。市役所では，正面玄関の作品展示コーナーのリニューアルを市役所の方と一緒にすることができた。札所では，住職さんへの挨拶やお遍路さんに作品を渡す活動ができた。 遠隔で繋がることで，地域の人たちとも間接的に交流することができていたが，直接交流できたことで，さらに生徒の活動への理解が深まったと考えている。生徒も直接会うことで経験や視野を拡げることができた。 遠隔交流の中で，直接交流ができたことは大いに意義があった。	・中高等部は，地域との連携や協働のために市役所や藤井寺との交流を進めてきた。 昨年度はコロナ禍で直接交流ができなかったが，今年度は可能な範囲で直接交流ができたことは，生徒にとって経験の範囲が広がり，成長につながった。 昨年度獲得した遠隔での交流も引き続き行い，ハイブリッド方式を取り入れることで，今後も一層効果的で深い交流ができるものと期待している。 ・センター的機能については，積極的に取組が行われていることがよくわかった。その上で卒業後に利用する事業所の状況についても知って欲しい。 県内ではコロナ禍で，事業所が閉鎖されることが増え，卒業生の行き場がなくなることが考えられる。ICT機器などを利用して，遠隔による就労等の推進を期待している。 ・チラシの作成やホームページの工夫で，本校のセンター的機能の発揮に効果があったと考える。 次年度も吉野川市や阿
		活動計画 ・基本的には遠隔での交流としているが，コロナの状況によっては，代表の生徒が直接現地に行き，あとの生徒は学校に残って遠隔で交流ができるようにする。	**活動計画の実施状況** ・吉野川市役所には代表の生徒が行き，札所は生徒が２班に分かれて交代で行くことで直接交流ができた。学校に残った生徒は，映像でその様子を見たり，質問をしたりすることで，遠隔による交流を図ることができた。		
	＜特別支援教育課＞ ・特別支援教育巡回相談員活動等を通して，本校のセンター的機能を発揮する。	**評価指標** ・センター的機能のチラシを作成し，関係機関等に100枚以上配付するとともに，特別支援教育巡回相談員による相談支援を行う。 ・巡回相談や研修の申込をしやすくするために，ホームページ上に地域支援の専用フォームを設ける。	**評価指標による達成度** ・新しく作成したセンター的機能のチラシを関係機関等に150枚配付するとともに，巡回相談の機会を通して助言を行った。 ・地域支援の専用フォームに，派遣依頼の記入例や相談シート，研修依頼シートを掲載したところ，それらを利用した巡回相談や研修の申込があり，手続きがスムーズになった。 **評定**：A	**（所見）** 今年度新たに作成した，本校におけるセンター的機能を広報するためのチラシを，地域の自立支援会議や特別支援学級担任者研修会等の参加者に配付した。 また，学校ホームページを活用して，巡回相談の派遣依頼の様式を掲載したり，「かも先生の特別支援教育だより」を定期的に掲載したりすることにより，地域の園や学校に対して特別支援教育	
		活動計画 ・吉野川市や阿波市の保育所，認定こども園，小・中学校，高等学校に在籍する特別な支援を要する幼児・児童生徒に関わる教員等への教育相談を実施するとと	**活動計画の実施状況** ・小・中学校等で特別支援教育に関わる教員等を対象に教育相談を行うとともに，地域の教育委員会と連携して，ネットワークづくりを推進し		

		もに，各校のコーディネーター等と連携を図り，ネットワークづくりを推進する。 ・特別支援学級（病弱・身体虚弱学級）担任者研修会参加校にチラシを配付し，その後も各校のコーディネーター等に連絡を取って，児童生徒の様子を把握する。 ・自立支援協議会等で広報活動を行う。 ・巡回相談の派遣依頼の様式等を学校ホームページに掲載しておく。 ・「かも先生の特別支援教育だより」を，年間６回以上更新する。	た。 ・病弱・身体虚弱学級を担任する教員を対象に，指導上の諸問題についての基本的な研修を行った後，児童生徒の様子を把握した。 ・自立支援協議会等で積極的に広報活動を行った。 ・学校ホームページによる情報発信を積極的に行い，巡回相談を依頼する際の流れや様式を掲載した。 ・「かも先生の特別支援教育だより」を，年間６回更新することができた。	に関する情報発信となったと考える。 　このように，積極的に広報活動することにより，巡回相談の依頼件数が昨年度と比較して，1.3倍（12月末現在）に増加した。 　今後も，引き続きセンター的機能を積極的に発揮し，地域における特別支援教育の推進に貢献できるよう務める。	波市を中心に更に巡回相談の回数を増やすとともに，それに対応できるような体制を作っていきたいと考えている。 ・病弱の支援学校として，本校を必要とする児童生徒に情報提供ができ，適正就学につながるような巡回相談の活動を模索していきたい。 ・ホームページに掲載した「かも先生の特別支援教育だより」を更に地域に貢献できるような内容にしていき，広報も続けたい。